

岡山県、鳥取県、島根県、広島県、山口県における魎猿風習は、とくに岡山県、広島県を中心に多く残っていることが明らかになっている。この地方における古分布を復元すると東北地方で見られるような一貫して減少を示すという傾向とは異なっていることが分かった。中国地方では、生息区画数で各年代を比較してみると、総数は東北地方と同じく大正12年、昭和28年、昭和60年と減少傾向にあるものの、分布地の時間的連続性はなく、分布地が消えたり、また新たな地区に出現したりするという生息記録地が変化するという傾向が見られる。こうした傾向が何を意味するかが問題である。まず考えられるのは、生息地の複雑な起伏地形、あるいは常緑樹林帯におけるニホンザル自体がもつ暮らし方の違いといった自然要因である。もうひとつは、常緑樹林帯での冬季における狩猟方法の制約や東北地方におけるマタギ集団など専門狩猟集団などの狩猟者事情のような社会的要因である。さまざまな理由が想定されるが、はっきりしない。今後、あらためて、東北地方と中国地方の古分布の減少パターンの違いを比較研究する必要がある。

今回、東北地方とくに岩手県からの魎猿発見情報があいつぎ、その確認のための調査に研究費の多くをあてた。中国地方の分布パターンとの比較、その原因としての生態学的調査をもとに、社会的需要の性質なども調査する必要があった。

今後も東北地方と中国地方の古分布比較を魎猿など需要の共通する要素を軸に、ニホンザルの古分布と風俗習慣で残された資料との関係をテーマに研究をつづけていく予定である。

#### B-51 霊長類の社会的認知に関する基礎的研究：生物・非生物の動きに関する理解から

村井千寿子（玉川大・脳科学研究所）

対応者：友永雅己

物理的対象（モノ）が「外的作用なしには運動しない」一方で、生物的对象は「外的作用があってもなくても自発的に運動する」。ヒトは発達の早い時期から、モノと生物に対しこのような異なる運動原理を期待する。生物・モノの区別が持つ生態学的重要性を考えれば、ヒト以外の種でも同様の認識が想定される。この点について、本研究ではニホンザルを対象に、注視時間を指標とした期待違反事象課題を用いて実験を行った。この課題は、被験体が、起こりえる自然な事象よりも起こりえない不自然な事象に対して長い注視を示す傾向を利用している。実験刺激には幾何学図形（長方形）がモノらしく水平に前進する動画、または、生物らしくイモムシのように伸び縮みしながら前進する動画を用いた。モノの対象では、静止している対象が別の対象との接触によって前進する場合には自然な事象となるが、接触なしに自発的に動き出す場合には不自然な事象となる。この時、被験体が後者の事象をより長く注視すると予想される。対して、生物的对象では、対象同士の接触がある場合、ない場合のどちらも起こり得る自然な事象となる。よって、両事象への被験体の注視は変わらないと予想される。実験の結果、生物的对象の場合には両事象に対する注視時間に違いは見られなかった。一方で、モノの対象の場合には接触事象への長い注視が見られた。つまり、不自然な事象に比べ自然な事象をより選好した。このことから、ニホンザルが生物的对象とモノ

的対象の運動に異なる原理を期待する可能性、また、選好の方向は逆ではあるものの、モノ的对象については、接触による運動・非接触による運動を区別している可能性が示唆された。

（論文）

1, Murai, C., Tanaka, M., & Sakagami, M. Physical Intuitions about Support Relations in Monkeys (*Macaca fuscata*) and Apes (*Pan troglodytes*). *Journal of Comparative Psychology*, in press.

2, Murai, C., Tanaka, M., Tomonaga, M., & Sakagami, M. Long-term Visual Recognition of Familiar Persons, Peers, and Places by Young Monkeys (*Macaca fuscata*). *Developmental Psychobiology*, in press.

（学会発表）

1, Murai, C., & Tomonaga, M.

Do monkeys read others' gaze statement in non-competitive situation? International Primatological Society XXIII Congress.

2, 村井千寿子・友永雅己

ニホンザルにおける他者の視線の認識：非競合場面での検討。日本心理学会第74回大会

3, 村井千寿子・友永雅己

ニホンザル幼児の長期記憶：3年前に経験した既知対象の視覚的再認。日本動物行動学会第29回大会

#### B-52 屋久島におけるシカのサル糞食行動に関する基礎的研究

西川真理（京都大・院・理）、持田浩治（京都大・理）

対応者：半谷吾郎

近年、屋久島の西部低地域では、ヤクシカがヤクシマザルの糞を食べる行動（以下、糞食行動）が観察されるようになった。糞食行動が起こる要因の1つとして、西部地域に生息するシカの餌資源（草本）の減少が考えられる。この仮説の妥当性を検証するため、本研究では、屋久島の西部地域と餌資源（草本）が豊富にある東部地域で、シカによる糞食行動の生起頻度を比較した。糞食行動は、地面に設置したサル糞から約3m離れた場所に自動撮影カメラを設置して記録した。糞およびカメラの設置時間は5時間とした。実験は2010年11月から12月に、西部地域で31試行、東部地域で25試行おこなった。シカがサル糞の半径1m以内に接近したのは、西部地域で20/31回、東部地域で8/25回であった（Pearson's Chi-squared test;  $p = 0.03$ ）。そのうち、シカが設置した糞を食べたのは、それぞれ15/20回、0/8回であった（Fisher's exact probability test;  $p = 0.0004$ ）。糞食実験をおこなった西部地域の植生は二次林であるが、東部地域はシカの餌となる牧草が豊富な町営牧場に隣接する場所である。このようなシカの潜在的な餌量の違いによって東部と西部で糞食頻度に違いが現れている可能性が示唆された。また、シカの高い消化能力はサル糞に含まれる種子の破壊につながる。そのため、屋久島におけるサルの種子散布効果は、シカという第三者を通して島内で地域的に異なる可能性が示唆される。

#### B-53 四国における野生ニホンザル個体群の特徴と有害駆除状況

谷地森秀二（四国自然史科学研究センター）

対応者：渡邊邦夫

四国では多くの地域でニホンザルによる農作物被害